

北海道大学 GCOE “Reshaping Japan’s Border Studies” 2nd Summer School に参加して

大学の研究機関の活動に研究と教育の両軸があることは言うまでもないが、昨今はさらにその成果を社会に積極的に還元することが要請されるようになっている。この 3 本の基軸をいかにしてバラバラにすることなく、有機的に結び付けて相互に刺激し合える形にするか、という課題は、どの研究組織も真摯に取り組んでいるものの、なかなか達成するのが難しいと考えられている。研究組織のメンバー各人が協力し合いながら、3 本の基軸すべてを同時に切り回していく能力が求められるからである。

研究対象地域を異にしながらも、同種の人文・社会科学系の全国共同利用・共同研究拠点に所属する者として、かねてよりスラブ研究センターの研究者たちの八面六臂の活躍ぶりには目を見張ってきた。今回、本サマースクールに講師として招聘頂く機会を得て、上記 3 基軸が一体化して回転しているのみならず、スラブ研究センターが国際的な研究者コミュニティの雲の中で明確な核を形成して多くの研究者を引きつけていること、そしてそれが北海道という地域社会に直に響くインパクトを持つものであることに、改めて強い印象を受けた。

本サマースクールは、1 週間余りにわたり、北東アジアから中東までを含む広大なユーラシア地域における国境・境界研究をテーマとして、日本国内のみならず世界各地からの大学院生、研究者を糾合し、盛り沢山のスケジュールを組んで実施された。私は「中東の日」とでもいうべき 8 月 4 日に”Visible and Invisible Borders of Syria and Lebanon”というタイトルでお話した。まず最初にシリア、レバノンを含む「歴史的シリア」という人類史上最長の歴史を育んできた地域が、実はそこに首都を置いて全体を統治する国家が 7 世紀のウマイヤ朝を除くとついに現れておらず、常に複数の国家が分立するか大帝国の一部に含まれるか、という特異な性格をもつことを指摘した。続いて、当地域の近現代史を概観して近代国家成立、現代の国境線の出現の経緯を説明し、19 世紀の東方問題と 20 世紀のフランス・イギリスの国際連盟委任統治支配の重要性を指摘した。そのうえで、シリア北西部/トルコ南東部のアレクサンドレッタ・アンティオキア係争地域、シリア南西部でイスラエル占領下のゴラン高原、シリア・レバノン国境問題一般、天然ガス田をめぐるレバノン・イスラエルの地中海境界問題について駆け足で解説した。いずれも最近 2-3 ヶ月から 2-3 年のスパンで大きな情勢変化を見せている問題である。

中東全般とイラクに関する酒井啓子教授、イランに関するモハンマド・ハーニー教授によるそれぞれの講義も興味深く、また 3 講演後に設けられた最近の「アラブの春」をめぐるラウンドテーブルの議論も楽しむことができた。必ずしも中東地域を研究対象としない参加者たちからの質問も、水準の高いものであった。

今回のサマースクールの特筆すべき点は、根室を中心とした道東地域を実地見学し、北方領土問題に直接向き合う現地の人々の声を聴きながら、現地で同問題を扱うセミナーに

参加する機会が得られたことである。国境・境界問題を扱う GCOE プログラムの、現地に根ざした研究活動の深さと、地方自治体やメディアを巻き込んだ社会還元活動のアクチュアリティとに圧倒される思いであった。

本サマースクールを通じて、スラブ研究センターの良い意味での「領域侵犯」的な研究姿勢と、飽くなき「相互浸透」を目指す問題設定の巧みさに感銘を受け、私自身の中東研究の方針にも様々なフィードバックがあった。この貴重な機会を与えて下さった GCOE 代表の岩下明裕教授をはじめ、スラブ研究センターのスタッフの皆様に、心からの感謝を申し上げる次第である。本スクールが極めて手際よく準備され、円滑に実施されたことも印象的であった。

本 GCOE プログラムが今後も力強く境界を押し広げていくことを願ってやまない。

黒木英充(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)